

建築博物館がない！

東北大学 大学院工学研究系
教授
五十嵐太郎
Taro Igarashi



海外に出掛ける時は、なるべく国立博物館を訪れるようにしている。手っ取り早く、その国の歴史と文化を理解できるからだ。およそ一〇年前、フィリピンの国立博物館を見学したら、建築をテーマにした部屋があり、写真やパネルを中心とした簡単な展示だったが、一応、古建築から近現代までの流れをたどることができた。

またシンガポールに新しくオープンしたナショナル・デザイン・センターでは、建築、都市開発、プロダクト、ファッションなど、各種のデザインの五〇年の歴史を閲覧できる展示が用意されている。わざわざ、この二カ国の名前を挙げたのは、日本よりも経済規模が小さいアジアの国でさえ、こうした建築の展示があるのに対

し、日本にはそれに類するものがないからだ。上野の国立博物館を回っても、絵画、彫刻、工芸に絞られており、建築は蚊帳の外である。したがって、日本に訪れた外国人、あるいは建築を学び始めた学生が、ここに行けば、まずは日本における建築の流れをざっと知ることができる場所が存在しない。

いや、東京にはギャラリー・間やGAギャラリー、あるいは国立近現代建築資料館があるじゃないか、という反論があるかもしれない。だが、いずれも常設の展示はなく、企画展のみである。言うまでもなく、常設展とはイベント的な企画展とは違い、収蔵するコレクションを軸とした展示であり、一部の入れ替えはあっても、

概説のように、全体の歴史を伝えるものだ。もっとも、安定した常設展を提供している数少ない施設としては、神戸の竹中大道具館が存在する。が、基本的には近現代以前の時代を扱い、また建築というよりは道具に焦点を当てている。本来ならば、その対象を更に拡張した博物館が必要だろう。移築による野外博物館としては、古民家を展示する川崎市立日本民家園、フランス・ロイド・ライト設計の帝国ホテルを契機に近代建築の収集を始めた明治村のほか、古建築から近代までを射程に入れた江戸東京たても園が健闘している。ただし、古代から現代までを網羅しているわけではない。また都心にないため、アクセスは良くない。

ちなみに、国立近現代建築資料館は、英語の名称が「ナショナル・アーカイブ」の施設となっているように、厳密にいうと、ミュージアムではない。実際、その活動は寄贈を受けた平面資料の収集を軸としており、展示は行うもの、必ずしもメインの事業ではない。これが美術館・博物館と大きく異なる点だ。また収蔵スペースの問題から模型などの立体は基本的に受け入れておらず、メタボリズムほか近現代建築の貴重な模型などは、パリのポンピドゥーセンターなど、海外への流出が今も続いている。こう

した状況は、かつての浮世絵のようだ。ポンピドゥーセンターは、ニューヨークのMOMA（近代美術館）のように、美術館の中に建築部門があり、オブジェとして見栄えする模型を積極的に欲しがっている。もちろん、それでも民間ではなく、永続性をもつ「国立」の建築資料館が日本に誕生したことの意義は大きい。資料の散逸を防ぐ防波堤となり、いざれ予算がつけば、現在の間借り状態を脱出し、きちんとした展示施設が整備される可能性が生じたからだ。

実際、デザイン業界から「建築はうまくやっただね」と羨ましがられている。三宅一生はだいぶ以前から国立デザインミュージアムをつくらうと提唱し、運動も起こしているが、なかなか成立しない状況におそらく業を煮やし、自ら六本木に「21 DESIGN SIGHT」を立ち上げた。

日本の各都道府県、各市に膨大な数の公立美術館がつくられたのに、建築を含むデザイン博物館が全然ないのはあまりにバランスが悪いだろう。日本の建築やデザインは世界から高く評価され、「日本の家」展（国立近代美術館）や「建築の日本」展（森美術館）のように、美術館で開催される建築展の動員も好調なのに、建築系の学芸員は極少数である。フランスでは各地方の美術館に異なる専門性を振り分け、オルレアンに二十世紀以降の実験建築をターゲット

にしたアーキラボが設立された。日本でも、あらゆる美術館が同じように印象派の絵画を購入するのではなく、それぞれに特色を与え、建築やデザインを専門とする施設を幾つか誕生させれば、よかったのではないだろうか。

オランダ、フランス、ドイツ、カナダには、立派な建築博物館がある。コレクションも充実し、自国の建築に関する資料がきちんと保管される場をもつ。例えば、パリの建築・文化財博物館は、中世の教会の断片のほか、ル・コルビュジエ設計のユニテ・ダビタシオン（マルセイユの集合住宅）の原寸大模型、そして現代建築までカバーする。こうしたミュージアムが存在しているからこそ、建築の歴史的な価値が共有され、文化として認められるのではないか。日本の建築界は頑張っており、それだけの成果も上げていると思うが、新聞やテレビなどのメディアの報道を見るかぎり、いまだに社会からの認知度は低い。日本もバブルの時、おそらく建築業界はお金が余っていたのだから、建築博物館を創設しておけばよかったと思うが、もう後の祭りである。ともあれ、二〇一八年の現在、日本にそれはない。いつでも外国人を案内できる常設展をもった建築博物館が存在することは、単に過去を知ることだけでなく、建築界の未来のためにも重要ではないだろうか。

ナショナル・デザイン・センター（シンガポール）の展示 50年の歴史



パリの建築・文化財博物館